

教 育 研 究 業 績

2019年 5月 1日

氏名 菊池 春樹

学位:博士 (ヒューマン・ケア科学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
心理学、教育学、社会医学	臨床心理学、特別支援教育、公衆衛生学・健康科学
主要担当授業科目	発達臨床心理学、グループアプローチ、臨床心理学実習、発達臨床心理学演習、臨床心理学特講、心の健康教育に関する理論と実践、障害者心理学演習、障害者心理学研究、カウンセリング研究、心理学研究法演習、心理実践実習

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

教育上の実績に関する事項	年 月	概 要
<p>1 教育方法の実践例</p> <p>1. 体験的な「ワーク」の活用によるテーマへの「気づき」を促す授業実践</p> <p>※担当した授業：「心理学基礎実験」、「心理学研究法」「コミュニケーションの心理学」</p>	2011年6月	<p>「出会いのじゃんけん」(ジャンケンで負けた方が、たくさんの方の話を聞いて得だったと感じられるワーク)、「二語文会話」(話し手の言葉を二語に制限し、コミュニケーションの障害を体験しあうワーク)、「石と友だちになろう」(講演活動で後述)などのワークを通して、障害などを抱えるマイノリティの思いや個性に気がつき、さまざまな視点から対象を捉え、支援していく態度を身につけることを意図した授業実践である。これらのワークは、授業のテーマに合わせて活用可能である。例えば、援助というテーマでは、「手のワーク」(やさしい手と悪い手の絵を描き、手のつく言葉をたくさん挙げてもらう。助けにも、凶器にもなる手をできるだけ良いものに使うことに気がつく)、発達障害をテーマにした授業では、「疑似体験のワーク」を行う。「発達障害疑似体験」は現在までに4つのワークを開発、展開している(①二語文会話、②ジャイアンのワーク：心の理論の弱さの体験、③記号の意味：中枢性統合の弱さの体験、④あやまらせるワーク：二次障害の発生機序)。前述の話し手の言葉を二語に制限する「二語文会話」は、話す役でコミュニケーション障害の一端を体験してもらい、聞き役は、そのような障害のある人を支援する体験ができる。</p>
<p>2. 構成的な「ロールプレイ」の導入による、より取り組みやすい実習授業の開発</p> <p>※担当した授業：「臨床心理学実習」、「臨床心理学特講」</p>	2014年4月	<p>臨床心理学における実習は、面接技法の習得を目的とし、「ロールプレイ」形式で行われることが多い。しかし、この「ロールプレイ」に組みにくい学生がいるのも事実である。そこで、授業全体を構成的に組み立て、a)導入 b)実習1 c)実習2 d)ふりかえりという、より抵抗の少ない個人で取り組めるワークから始め、最終的には全体で実習内容をシェアできるような実践を行った。抵抗の高い「ロールプレイ」(実習2)も、その前の実習1に、個人で「シナリオ作成」をすることで、取り組みやすい活動になり得た。</p>

<p>2 作成した教科書・教材</p> <p>1. わかりやすい犯罪心理学 第9講 発達障害</p>	<p>2010年9月</p>	<p>安齋順子、菊池春樹他10名 教科書のコンセプトについて、著書欄で後述する。常識が通じない危険な発達障害というレッテルは非科学的なイメージであり、多くの発達障害者はルールを忠実に守って生活していることを啓発する教材として活用できる。犯罪という不幸な場面に遭遇しないよう、発達障害を早期に発見し、科学的な根拠に基づいて支援していくための基本的な事項を学ぶことができる。</p>
<p>2. ここだけはおさえない学校 臨床心理学 第10講 うつ病</p>	<p>2012年4月</p>	<p>小林朋子、菊池春樹他12名 教科書のコンセプトについて、著書欄で後述する。子どものうつ病は、決してまれな病態でなく、子どもの精神保健にとって重大な課題である。心因論で説明されがちな「うつ病」について、最新の知見に基づき、「からだの病気」として捉え直すことが、子どもの治療及び家族への援助として有用であることを解説している。問題を抱えた子どもや家族を支援するヒントを提供する教材として活用できる。</p>
<p>4 ここだけはおさえない学校臨床心理学 改訂版</p>	<p>2018年9月</p>	<p>小林朋子、菊池春樹他13名 DSM-5の登場を受け、教師および保育士といった子どもにかかわる専門職の養成段階や現職者の研修等で使用する本書の改訂が行われた。著者は、気分障害について、DSM-5の子ども気分障害の治療への反応や治療構造について示した。</p>
<p>3 当該教員の教育上の実績に関する 大学等の評価</p> <p>1. 2018年度学生による授業評価</p>	<p>2019年3月</p>	<p>東京成徳大学応用心理学部における「グループアプローチ」(2年選択、受講生58名)の学生による授業アンケートで、「この授業を受けて良かった」(4.5ポイント/5.0; 大学全体平均4.1)、「適切な配布資料や教材」(4.4; 平均4.2)、「質問相談に適切に対応」(4.4; 平均4.1)と高い評価を得た。</p>

職務上の実績に関する事項		
事項	年月	概要
<p>1. 資格、免許</p> <p>①精神保健福祉士 ②公認心理師</p>	<p>2002年4月 2019年2月</p>	<p>第10420号 第1254号</p>
<p>2. 特許</p>		<p>特記事項なし</p>
<p>3. 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>1) 精神保健福祉士としての実務</p>	<p>2002年8月</p>	<p>精神保健福祉士として5年以上(前職、精神科診療所への勤務が11年)の実務経験があるため、精神保健福祉士養成のための共通科目、専門科目を指導できる専任教員、および、実習・演習担当教員としての要件を満たしている。前職では、10年にわたり、50名を超える実習生を指導し、2014年と2015年入学の応用心理学部精神保健福祉士養成コースの開設では、臨床心理学科の実習巡回、指導を担当した。</p>

2) 「教育相談」	2006年6月	千葉県立我孫子特別支援学校の「教育相談」を担当した。思春期に生じる問題を中心に、児童・生徒の相談、保護者の相談、担任の相談を行った。
3) 講演活動	2005年6月	保健所、保育園、特別支援学校、障害児親の会等で「発達障害」「家族心理」等、様々なテーマで講演を行っている。
<最近1年の活動>		
①千葉県立我孫子特別支援学校清新分校「性指導の実践」	2018年6月	軽度の知的障害のある高校生に対しての性指導についての実践と教員へのデモンストレーションを行った。
②東京成徳大学深谷中学校・高等学校保護者研修	2018年7月	本学園の深谷中学校・深谷高校の保護者に対して「親子コミュニケーション講座—思春期の子どもへの接し方—」と題した講演会を行った。
③茨城県教育委員会専門家派遣事業	2018年8月	小中学校の教員への研修として、通常学級における特別に配慮を要する児童への支援の在り方を講義した。
④静岡県児童相談所児童心理司等研修会	2019年2月	発達障害児と性の問題、性教育の実践、性加害への支援をテーマに静岡県内の児童相談所の児童心理司、児童福祉施設の職員に対しての研修を実施した。
⑤株式会社パソナフォスター ベビーシッター、保育士研修会	2019年2月	ベビーシッターや保育士を派遣している企業であるパソナフォスターにおいて、発達障害のある子どもへの支援についての研修を行った。
⑦利根町ゲートキーパー研修	2019年2月	自殺対策の一環として各自治体はゲートキーパーを要請している。傾聴ボランティアや民生委員などの市民を対象に、自殺に追い込まれる人の心理や、聴き方について講義した。
⑧一般社団法人 茨城県心身障害者福祉協会 知的障害者福祉部会支援スタッフ委員会研修会	2019年3月	障害者施設で障害者支援をしている職員を対象に、発達障害、身体抑制、高齢者問題など、近年、現場の職員間で話題になる事多い問題について、その見方と手立てについて講義した。
4. その他		
職務上の実績に関する事項		
1. 外部実習調整委員	2018年12月	東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科、大学院心理学研究科は、2018年度より、公認心理師養成のためのカリキュラムをスタートさせた。特に大学院は2019年度から始まる心理実践実習のために、さまざまな準備が必要となった。その準備の外部実習の責任者として、リーダーシップを取り、円滑な運営ができるよう努めた。
2. クラス担任	2013年4月	東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科担任として、学生生活をサポートした。学生の相談に乗り、また援助要請がうまくできず欠席がちな学生、学力が不足しがちで授業についていけない学生に積極的に関わり、登校を促し、卒業までの退学率を1割に抑えることができた。2018年度より、再び担任を受け持ち、就学意欲を高め、一人ひとりが充実した学生生活を送れるよう、支援に努めた。

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 わかりやすい犯罪心理学	共著	2010年9月	文化書房博文社	<p>犯罪心理学の教科書として、心理学の専門知識を持たない初学者にも、興味を持って易しく読み進めていけることをコンセプトとして編集された。</p> <p>著者は、発達障害と犯罪について解説した。発達障害が単独で犯罪と結びつく例は稀で、二次障害や他の精神疾患を併存しながら、犯罪に結びついていく心理的な機序を特に強調した。</p>
2 ここだけはおさえたい学校臨床心理学	共著	2012年4月	文化書房博文社	<p>教師および保育士といった子どもにかかわる専門職の養成段階や現職者の研修等で使用する教科書を意図して編集されている。</p> <p>著者は、うつ病について執筆した。子どものうつ病は稀でなく、成人のうつ病との共通点もあるが、治療への反応や治療構造に違いがあることを示した。</p>
3 「社会による子育て」ハンドブック	共著	2016年1月	岩崎学術出版	<p>子育てにかかわるすべての支援者に向けたハンドブックを目指して構成されている。子ども虐待、アタッチメントの問題、トラウマ・解離、発達障害など発達の問題の理解と支援について書かれている。</p> <p>著者は、発達障害について執筆した。英国自閉症協会が推奨している SPELL の原則の具体例を挙げ、発達障害児への支援を「社会による子育て」で行えるような方針を提示した。</p>
4 ここだけはおさえたい学校臨床心理学 改訂版	共著	2018年9月	文化書房博文社	<p>DSM-5 の登場を受け、教師および保育士といった子どもにかかわる専門職の養成段階や現職者の研修等で使用する本書の改訂が行われた。著者は、気分障害について、DSM-5 の子どもの気分障害の治療への反応や治療構造について示した。</p>

(学術論文)				
1. 思春期の発達障害児の支援—養護学校教員の調査より—	共著	2008年12月	茨城県臨床医学雑誌	思春期の発達障害児を支援する上で、日常的に子ども達に関わる教員に調査を実施し、クラスで感じている困難としてどのようなことがあるか、困難に感じていることがらは何が多いのかを明らかにした。同時に、医療と学校との関わりについて考察することを目的とした。もっとも多くの養護学校教員が感じている困難が性的問題であった。また、医療との連携については、うまくいっていないと感じている教員の意見が多かった。
2. 児童養護施設の被虐待児童とケアワーカーのアタッチメントに焦点をあてたプログラムの有効性の検討	共著	2009年7月	子どもの虐待とネグレクト 第11巻第2号	児童養護施設の虐待を受けた児童とケアワーカーを対象として開発したアタッチメントに焦点をあてたプログラムの効果を検討した。プログラムによって、大舎制児童養護施設の児童にアタッチメントの安定化、個別的なケアを求める行動を促進したこと、また、施設内で問題とされる統制的行動を減少させ、子ども自身のトラウマ反応の減少に寄与できたことが示唆された。筆者は、プログラムの開発、有効性検討のための実験、ビデオ分析、統計処理を担当した。
3. 思春期の自閉症スペクトラム障害の人を養育する家族のためのプログラムの開発～セクシャリティに焦点をあてて～	単著	2011年3月	筑波大学博士論文	特別支援学校における実態調査や内容の適切さについての調査、支援者による議論をふまえて、「思春期のASDの人を養育する家族のためのプログラム」を開発し、有効性を検討した。準実験デザインを採用したプログラムの有効性の検討から、プログラムは、家族の「精神健康度」を高め、「子どもへの性教育」の実施機会を増加させることが示唆された。プログラムの機序として、思春期における養育の知識と技術を学び、成長に伴い変化が要求される家族関係への新たな気づきが得られたことから、家族の不安が解消されたことが想定された。
4. 自閉症スペクトラム障害の思春期における性的な行動に関するアセスメントツールの作成	共著	2011年5月	児童青年精神医学とその近接領域 第52巻第1号	わが国における自閉症スペクトラム障害(ASD)のある思春期の人の性的な行動を評価するためのチェックリストを作成した。特別支援学校での調査と先行研究を参考に1)性教育、2)性的な行動、3)プライバシー、4)親の考えの4領域で測定する「ASD用性的行動チェックリスト」を作成した。同意の得られた96名の思春期の子どもを持つ親を回答者に本チェックリストを用いた質問紙調査を行い、信頼性と妥当性を検証した。

5. 性問題行動を示す自閉症スペクトラム障害の青年のためのコーピング・スキル・トレーニング・プログラム開発の試み	共著	2014年3月	東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要21	性問題行動を示す、自閉症スペクトラム障害 (ASD) 青年8名に対して行ったトレーニングは、性問題行動がストレスフルな出来事に随伴して行われること、また、ASD 青年は、日頃からストレスフルな状況に晒されていることを観察し、そのようなストレスフルな出来事にコーピング (対処) できることで、随伴する性問題行動の減少を図ることを目的に開発された。中長期的な経過観察を通して、プログラムの有効性が示唆された。
6. 「いたいいたいのとんでいけー」の臨床心理学的考察	単著	2015年3月	東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要22	子どもの安心感を切り口に、「いたいいたいのとんでいけー」を臨床心理学的視点で論じた。保育士、両親、大学生を対象に行った質問紙調査により、痛みを伴う状況において「いたいいたいのとんでいけー」がどのように安心感に機能しているか、仮説生成的に探った。
7. 学生のメンタルヘルスに対する援助活動に関するプロジェクトⅡー学習支援を中心としてー	共著	2015年3月	東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要22	学生のメンタルヘルス向上を目指したプロジェクトの成果を報告した。著者は、発達障害、あるいは発達障害傾向の学生の困難についての実態調査を担当した。その調査結果から大学内の実態を示し、教職員向けのリーフレット作成に取り組んだ成果を報告した。
8. 自閉症スペクトラムの児童・青年における罪悪感と恥について	単著	2016年3月	東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要23	自閉症スペクトラム障害 (ASD) の人の罪悪感や恥といった感情のあり方について、障害特性からそのような社会的感情を持ちにくいとする立場、一方で、社会的感情と共に自己概念を発達させていることを指摘する立場に分かれて議論が続けられている。ASD の保護者に対して質問紙調査を実施し、大学生との比較から実態を探った。ASD の人の罪悪感や恥の形成プロセスについて、知的障害の程度が影響すること、他者の反応を参照しなくて良い状況、視覚的に理解できる状況において喚起しやすいことを示唆した。ASD の養育に際し、行動や適応だけでなく、自己意識的感情に注目することの意義が見いだされた。

<p>9. 大学生の道徳的判断における社会的感情のあり方についての考察</p>	<p>単著</p>	<p>2016年5月</p>	<p>東京成徳大学 臨床心理学研究 20</p>	<p>道徳性の発達において従来の認知のみでなく、感情の役割が再考されるようになった。大学生の道徳的判断に、罪悪感や恥、妬みなどの社会的感情のあり方がどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした。道徳的ジレンマ課題への回答パターンは「合理的」(33.2%)「直観的」(39.8%)「回避的」(25.1%)「独創的」(1.9%)に分類された。多変量解析の結果、「回避的」な道徳的判断に、罪悪感よりも恥を感じる傾向と妬みにくさに関連していることが示された。</p>
<p>10. 父親とのアタッチメントスタイルが大学生の援助要請スタイルに及ぼす影響</p>	<p>共著</p>	<p>2019年4月</p>	<p>東京成徳大学 臨床心理学研究 22</p>	<p>島崎姫乃、菊池春樹 青年期の大学生が、父親をアタッチメント対象としてどのように捉えているのか、また父親とのアタッチメントスタイルが現在の人間関係にどのように影響するかを明らかにすることを目的とした研究を実施した。アタッチメントスタイルと援助要請スタイルの関連では、アタッチメントスタイル安定型は援助要請自立型の占める割合が有意に高く、回避型の占める割合が有意に低い結果が得られ、父親とのアタッチメントスタイルが現在の人間関係も影響していることが示唆された。</p>

(学会発表)				
1. 精神保健福祉士による発達障害児への学校訪問支援の効果	単独	2006年3月	関東子ども精神保健学会 第3回学術集会 一般演題口演	発達障害の児童は、学校の理解が十分でない場合、問題行動を起こしたり、いじめの対象になるなどのケースが少なくない。学校外の機関として児童精神科診療所の精神保健福祉士が解決のために継続した学校訪問支援による介入を行った13事例について報告し、6年間介入が継続した1事例の母親へのインタビュー調査からその介入効果について報告した。教員の発想転換や担任以外の教員へ児童の理解が広がったことが効果として挙げられた。同2006年5月25日付 教育医事新聞に同発表が掲載された。
2. 精神的な問題を抱えた母親へのとぎれのないサポート ～コンテイナー／コンテインドモデルとその回復に着目して	共同	2007年12月	日本子どもの虐待防止学会 第13回学術集会 三重大会 一般演題口演	虐待にいたる危険因子とされる親の精神障害と子どもの障害がある事例をとりあげた。子どもの心が発達するのを助けることが、「養育」の大きな役割であり、この役割を達成するためには、子どもの様々な感情を受け止め、これを無害にして返してやる「気持ちの受け皿」機能が重要である。親の受け皿機能を回復させる視点を共有し、連携して支援を実施した事例を提示し、精神的な問題を抱えた母親へのとぎれのないサポートについて考察を加えた。(共同演者：森田展彰)
3. 自閉症用性的行動 評定尺度の作成	共同	2008年11月	日本児童青年精神医学会 第49回総会 広島国際会議場 一般演題ポスター	わが国における思春期の自閉症児の性的な行動を評価するための尺度作成を目的とした。親と連携しながら、思春期年代の自閉症児の性的な行動の表現を評価できること、性的な行動に関する支援ニーズを把握することを目指して、1)性教育、2)性的な行動、3)プライバシー、4)親の考えの4領域を59項目によって測定する「自閉症用性的行動評定尺度」を作成した。96名のアンケート調査の結果から、尺度の信頼性、妥当性を確認した。(共同演者：森田展彰、田上洋子)
4. 自閉症を有する子どもと家族の性的な行動に焦点をあてた思春期・青年期支援プログラムの開発～ニーズと社会的妥当性～	共同	2009年11月	日本児童青年精神医学会 第50回総会 国立京都国際会館 一般演題口演	自閉症の障害特性を考慮し、思春期、青年期の課題として性的な行動に対処することを含めた、家族向けプログラムを試作した。本研究では、試作したプログラムを、特別支援学校に通う思春期年代の生徒の親の一部を体験してもらい、その前後に質問紙調査を実施した。これをもとに、思春期支援のニーズや、内容が適切であるか等のプログラムの社会的妥当性を検討し、今後の本プログラム実施の準備資料とした。(共同演者：森田展彰、田上

<p>5. 自閉症スペクトラム障害とセクシャリティに焦点をあてた家族プログラムの有効性の検討</p>	<p>共同</p>	<p>2010年10月</p>	<p>日本児童青年精神医学会第51回総会 前橋商工会議所会館 一般演題口演</p>	<p>洋子) 「自閉症スペクトラム障害とセクシャリティに焦点をあてた家族プログラム」を開発し、有効性を検討した。準実験デザインを採用したプログラムの有効性の検討から、プログラムは、家族の「精神健康度」を高め、「子どもへの性教育」の実施機会を増加させることが示唆された。プログラムの機序として、思春期における養育の知識と技術を学び、成長に伴い変化が要求される家族関係への新たな気づきが得られたことから、家族の不安が解消されたことが想定された。 (共同演者：森田展彰、田上洋子)</p>
<p>6. 発達障害児・知的障害児に対する性教育の実践</p>	<p>単独</p>	<p>2011年3月</p>	<p>性教育研究会第1回学術大会 国立オリンピック記念青少年総合センター 性教育実践講座</p>	<p>性に関して、発達障害児や知的障害児が苦戦している現状を特性や背景をふまえて把握した。見えないものを理解しにくい特性を持つ彼らにとって、見える「性情報」と見えない「性教育」とで誤学習が促進されている現状を指摘した。児童福祉施設では、職員が、発達障害児や知的障害児が示す理解の仕方のギャップに困惑していた。適切な性教育を上手に「見せる」工夫として、「ソーシャルストーリーによる性教育」実践を紹介した。</p>
<p>7. アタッチメントに焦点をあてた介入ー児童養護施設の被虐待年少児童を対象として～</p>	<p>共同</p>	<p>2011年12月</p>	<p>日本子どもの虐待防止学会第17回学術集會 つくば国際会議場 研修企画「評価・支援の方法を学ぶ」</p>	<p>児童養護施設の未就学児童とケアワーカーとの安定したアタッチメント関係を促進し、アタッチメントに関連する問題行動とトラウマ反応の減少をねらいとするアタッチメント・ベイスド・プログラム(以下、ABP)を開発した。ABPは、児童養護施設に暮らす未就学児童に加えて、学童期の被虐待児童に対しても適用され、チーム援助における支援者間の共通理解に生かされている。ABPでは、子どもの安心感・安全感を基に、楽しく遊ぶことに重点を置き、子どもの状態に合わせて、非構成的な自由遊びと構成的な課題遊びを展開する。コンサルテーションにおいて子どもの状態が解釈され、適切な遊びが選択される。このような支援方法について解説した。 (共同演者：徳山美知代、大橋早苗、田辺志麻、又吉由佳里、森田展彰)</p>

8. プロジェクトアドベンチャーの手法を用いたグループワーク	共同	2013年12月	日本子ども虐待防止学会第19回学術集会信州大会	ワークショップを企画し、学会員への研修を行った。児童養護施設や家庭において実施された、プロジェクトアドベンチャーの手法を用いたグループワークの有効性を紹介し、そのコンセプトである「フルバリュー」が子どもの肯定感を高めることを示した。具体的な施設や家庭での導入方法を会場の会員と共に学んだ。 (共同演者：徳山美知代、関智子)
9. 発達障害の困り感のある大学生支援マニュアルの作成とその有用性	共同	2014年8月	第46回日本カウンセリング学会 名古屋大学	A私立大学におけるメンタルヘルスに問題のある大学生の在籍者の実態を明らかにし、そこで取り組まれている発達障害の困り感のある大学生支援について、マニュアル作成からシステム構築について論じた。教職員の反応から一定の有用性が見いだせた。 (共同演者：田村節子、渡部雪子)
10. 学生の困り感に対する援助モデルの作成および援助活動報告	共同	2014年9月	第16回日本学校心理学会 玉川大学	A私立大学におけるメンタルヘルスに問題のある大学生の援助モデルについて、これまでの取り組みを概観し、6年計画の新しい援助モデルを作成し、発表した。これまでの取り組みを第1期とし、そこでは対人面に困り感を持つ学生に対するコミュニケーション援助を行った。新しい援助モデルでは、向こう3年間の第2期を学習面の困り感を持つ学生への援助モデル、その後の3年間で就業活動に結びつく援助モデルについて提案した。 (共同演者：田村節子、渡部雪子、新井邦二郎、根津克己、西村昭徳)
11. 児童精神科診療所における「複合的アプローチ」の検討	共同	2015年3月	第34回 日本社会精神医学会富山大会	精神科診療所は地域の受け皿として、さまざまな問題を抱える患者とその家族を支援していく必要がある。そこでは、包括的な支援が望まれるが、一朝一夕に包括的な支援ができるわけではない。よって、1つ1つのアプローチ、例えば、外来での診察に加えて、家族心理教育や学校での環境調整などを積み上げていく必要がある。それらの複合的なアプローチの実態と機能を診療録調査で探った。より早期の複合的アプローチが良い転帰に有効であることが示唆された。 (共同演者：田中麗香、田上洋子)